

Disclosure Project Intelligence Archive (DPIA)
Richard Doty AFOSI.mp4
UFO Crashes & Experimental US Prototypes

ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ (DPIA)
リチャード・ドーティのインタビュー

UFO 墜落と米国製の反重力実験機

[文中の註 (*) は訳者による]

リチャード・ドーティは、空軍特別捜査局 (AFOSI) 防諜特別捜査官だった。彼は 8 年間にわたり、特別に UFO/ET 問題に対処する任務を帯びて、ニューメキシコ州カートランド空軍基地、ネリス空軍基地 (いわゆるエリア 51)、その他の場所で勤務した。2016 年 7 月、グリア博士はニューメキシコ州アルバカーキでリチャード・ドーティと会った。そこで彼はドーティに 3 時間のインタビューを行ない、驚くべき真実を語る爆弾証言を引き出した。その内容は、UFO に関する偽旗作戦 (false flag operation) の存在、メディアの墜落、有名なキャッシューランドラム UFO 事件で一般市民に被害が出た責任が米国政府にあること、等々を確証するものだった。以下は、ディスクロージャー・プロジェクト情報アーカイブ (DPIA) で公開されている約 1 時間半の内容である。

[1]

=====
リチャード・ドーティ：私はリチャード・ドーティといいます。カートランド空軍基地 (*ニューメキシコ州) の空軍特別捜査局 (AFOSI) で防諜担当特別捜査官をしていました。ですから、私の任務の一つは、基地の防諜作戦を実施することでした。そこででの任期中、最初の数箇月間に、私は ET コンタクトに関わる、米国政府のある特殊接近プログラム (special access program ; SAP) について説明を受けました。それは ET (地球外知性体) の地球来訪と、これらの ET への空軍の関わりについてのものでした。

スティーブン・グリア：なるほど。あなたがそのプロジェクトに‘読み込まれ’たのはいつですか？ (*ある区画化プログラムに‘読み込まれる’ ; read into’とは、そのプログラムについての説明を受け、機密保全誓約に署名することにより、その機密情報に接近する資格を与えられることを意味する)。

リチャード・ドーティ：1979 年の夏です。それは特殊接近プログラム (SAP) でした。私はそれに接近するための特別な機密取扱許可を持っていました。私にそのプログラムの説明をしたのは、ワシントンから来た空軍大佐です。彼が、私を含む数人にこのプログラムの説明をしたのです。

スティーブン・グリア：それはコード名、またはプロジェクトのコード番号を持っていましたか？

リチャード・ドーティ：はい。それは最初の——どう言ったらいいんでしょうか。というのは、この中にはまだ幾つかの機密部分があると思われるからです。コード名は‘ヤンキーブラック(Yankee Black)’といいました——それはUFOのプログラムそのものではなく、プログラムの説明でした。実際には、入り口プログラムのセキュリティコードでした。‘ヤンキーホワイト(Yankee White)’はホワイトハウスへの入り口であり、‘ヤンキーブラック(Yankee Black)’は、このプログラムに入り込む、または‘読み込まれる’ための入り口でした。

スティーブン・グリア：その説明の中で、彼は何を語ったのですか？ その大佐の名前を憶えていますか？

リチャード・ドーティ：大佐の名前は言わないでおきましょう。説明は米国がETと関わりを持つことになった歴史から始まりました。最初にロズウェル墜落の話がありました。しかし、墜落は実際にはロズウェルで起きたものではありません。それはニューメキシコ州コロナの南西で起きました。2番目の墜落場所は、ニューメキシコ州マグダレナの西、ホース・メサで発見されました。ロズウェル墜落の場所は1947年6月に見つかりましたが、マグダレナで起きた2番目の墜落は、1949年頃まで気付かれることがありませんでした。

スティーブン・グリア：彼らはその調査、回収で何を発見したのですか？ 彼らはそれをあなたたちに語りましたか？

リチャード・ドーティ：私たちは映像を見せられました。彼らの回収作業を記録した16ミリ映像だったと思います。それにはナレーションが付いていましたが、明らかに機密映像でした。ナレーターは、いつ墜落が起きたのかを詳しく述べていました。墜落が起きたのは1947年6月後半です。映像には、軍関係者が墜落現場でETの遺体と墜落機を回収している様子が映っていました。そこで彼らは、生きている1体のETを発見しました。私たちが受けた説明では、その生きているETはカートランド・フィールドに運び込まれました。後のカートランド空軍基地です。その後いつの頃か、ロスアラモスに移され、しばらくそこに置かれました。そのETに何が起きたのか、映像に詳しい説明はありませんでしたが、死亡したとの説明は確かにありました。1952年頃のことだと思います。ETの遺体は低温凍結され、オハイオ州デイトンにあるライト-パターソン・フィールド(*後のライト-パターソン空軍基地)に送られました。

スティーブン・グリア：彼らは機体と遺体の、実際の映像を見せたのですね？ それらはどんな様子でしたか？

リチャード・ドーティ：墜落した機体は、ほぼ楕円形つまり卵形でした。それは円盤の形をしていませんでした。その生物たちの身長は約4フィート(*約1.2メートル)で、幾

つかの遺体は振れたり潰れたりしていました。傷みがひどく、ばらばらになっていました。しかし、2体は比較的損傷が少ない状態でした。その理由はよく分かりません。検視解剖が行なわれたかどうかの説明はありませんでした。その生物たちに耳はないようでした。鼻に相当する部分には浅い窪みがあり、とてもとても大きな目を持っていました。それらは体に密着する服をまとっていたので、まるで裸体のように見えました。手に親指はなく、先端に吸引装置のついた4本の指がありました。そのうちの1体は、頭部にある種の装置を付けていました——ヘルメットか、イヤホンか、または機体や何か他のものとの間の通信装置だったかもしれません。

機体の内部からは、多くのものが見つかりました。その中に、一見プレキシガラス（*アクリルガラスのブランド名）と思われる長方形の物体がありました。それが宇宙機のエネルギー装置であると解明されるまでには何年もかかりました。私たちはまた、1949年にホース・メサで墜落機が回収されたときの映像も見せられました。その墜落は1947年の（*コロナでの）墜落と同時に起きましたが、墜落現場が人里離れた場所にあったため、その農場主が2年後に発見するまで見つからなかったのです。その頃には遺体は朽ち果てていましたが、機体はコロナの近くで見つかったものと同型でした。つまり、卵形です。しかしその機体には、コロナで墜落した機体とほぼ同じ損傷痕がありました。私が思うに、それを調査した科学者たちは、二つの機体は何らかの理由で互いに衝突したと解釈したでしょう。その説明はありませんでしたが。

これらの墜落が起きた時系列とその場所に関しては、誰も正確に把握していません。この事件の説明を受けた人々が苛立たしく思うことの一つは、事実であることが少ないということです。UFO界隈は自ら誤報を広めます。ロズウェルの本を書く人々の90パーセントは、軍にいたことも、情報分野で働いたこともありません。また、彼らは何かの機密取扱許可を持っているわけでもありません。彼らは、二番煎じ、三番煎じ、四番煎じの情報を信用しているだけなのです。こうして彼らは、UFO界隈の間にさらに誤報を広めていきます。7月に起きたとされるロズウェル墜落は、実際には6月末に起きており、回収プロジェクトが7月に始まったのです。事実を正確に提示しようとした人も何人かいましたが、彼らは笑いにされ、その情報は信用されてきませんでした。

ホース・メサでの墜落は1949年まで発見されなかったため、世間の人々はそれが（*コロナでの墜落とは）まったく別のものだと考えています。実際には、その機体はコロナで回収されたものと完全に同じでした。映像には、墜落機の損傷痕のスケッチを並べて見せている場面がありました。論理的に物事を見る人なら、二つの機体は衝突したのだと理解できたはずですが。なぜ衝突したのか？ これも私の考えですが、おそらく生きていたEBEN（*Extraterrestrial Biological Entity；地球外生物学的実体；イーブン）——彼らはその生物をそう呼んでいました——は、衝突がどのようにして起きたのかを説明したと思います。もっとも、彼（*EBEN）がそれをどのように説明したのかは、一度も教えられたことがありませんでしたが。

私が知っているのは、その日は雷雨の嵐だったということです。その中で衝突は起きました。しかし UFO 界限では、一部の人々により二つの墜落が分離され、さらに別の人々によりこれらは無関係であるとされてしまったのです。これが UFO 界限の実に嫌で厄介なところですよ。私がこれらの人々に関わりを持たないのも、それが理由です。私は UFO 大会に行き、真実は何かということの説明しようと思いました。しかし、誰も聞きたがりませんでした。なぜなら、彼らは本を書き、その中で墜落はこのようにして起きたと述べているからです。彼らは、自分が真実を知らないということを知っていても、話を聞こうとしないのです。

スティーブン・グリア： そのとおりです。事実とやらを持ち出して邪魔しないでくれ、私の考えは変わらないと。

リチャード・ドーティ： まさにそのとおりです。

スティーブン・グリア： 私がいつも経験していることです。

リチャード・ドーティ： そうですね。

リチャード・ドーティ： その機体の大きさは、縦横がおよそ 35 フィートに 42 フィート（*10.5 メートルに 12.6 メートル）でした。この宇宙機に飛行制御システムとおぼしきレバーや航空電子機器の類は一切ありませんでした。しかし地球の科学者たちは長い時間をかけ、最終的にすべてを解明しました。その生物たちは手を制御盤に置き、頭にはこのヘッドセットを付けます。ヘッドセットは、何らかの方法で彼ら（*EBEN ; イーブン）を操作するか支援するかして、宇宙機を制御させるのです。彼らのアビオニクス（*航空電子機器に相当する仕組み）はとても複雑で、その解明には何年もかかったと思います。その説明はありませんでしたので、ここで私が語れることは何もありません。しかし、彼らは墜落機をライト-パターソンに運びました。おそらく当時——1940 年代の終わり——としては、そこが最適な場所だったのでしょう。そこでは一流科学者たちがこれらの宇宙機を逆行分析（リバース・エンジニアリング）し、それがどのように作動するのかを解明することができたのです。

スティーブン・グリア： そのエネルギー装置、半透明のプレキシガラスのようなものですが、あなたはその使い方を教えられましたか？ 彼らは、その装置がどのようにして機能するのか、解明しましたか？

リチャード・ドーティ： 直接に説明されたことはありません。しかし、勤務も終わりに近づいた頃、私はワシントンである文書を目にしました。そこには、宇宙機の内部で見つかった一見プレキシガラスと思われる長方形の物体について、米国の科学者たちは何を解明したのか、その内容が説明されていました。それは、ゼロポイント・エネルギーを利用したエネルギー装置でした。それが、彼らがゼロポイント・エネルギーと呼んでいたものでした。しかもこの装置は、きわめて小さな 1 個のフラッシュライトや時計から一つの都市

全体までを賄えるような方法で接続されていました。その電力の大きさは、需要に応じて決められていました。それぞれの宇宙機に1個ずつありましたが、マグダレナの西、ホース・メサに墜落した機体の装置は、コロナで発見された機体のそれよりも大きいものでした。その理由を科学者たちは理解していなかったと思いますが、それでもそれらの装置は同じように作動しました。

スティーブン・グリア： 分かりました。では、彼らはそのエネルギー装置を他の研究プロジェクトに応用する方法を見つけましたか？ それが研究され、米国製 UFO の実験機に使われたのかどうか、あなたは知っていましたか？

リチャード・ドーティ： そのプログラムの中では、一度も説明されませんでした。しかし、彼らはそうしたはずです。私はそれについて話すことができません。なぜなら、私は自分がしたこと、自分が見たことしか話せないからです。そのことについては説明を受けませんでした。

[2]

=====
スティーブン・グリア： 結構です。知りたかったことにはすべて答えていただきました。大佐から受けたこの説明の中で、他に注目すべきことはありましたか？

リチャード・ドーティ： 説明は ET 宇宙機から受ける脅威に関するものでしたので、地球に飛来した別の異星人の宇宙機についての説明もありました。彼らの説明に出てきた宇宙機は4種類で、ET も4種類です。しかし、これらの ET の写真がどこから来たのか、その出所については一度も説明されませんでした。これらの奇妙な ET たちは、実際に映像の中に映し出されましたが、それらは EBEN（イーブン）とは違う場所から来た ET たちでした。

そのうちの一つの ET 種族は、昆虫のような外見をしていました。巨大な眼、とても大きな頭部、それに小さな体躯を持っていました。腕には二つの突起物、つまり2本の腕それぞれに二つの手があり、足には幾つかの関節がありました。身体の正面に気泡状の突起物があり、背面にはこぶのようなものがありました。それが一つの種族です。もう一つの種族は……

スティーブン・グリア： 大きさはどれくらいでしたか？

リチャード・ドーティ： 身長は平均的な成人ほどで、5フィートから6フィートの間です。2番目の ET は人間型で、とても背が高く、痩せていました。腕は長く、膝まで届くほどの長さを持っていました。つまり、その先端は腰と足首の間辺りにありました。手は普通でした。顔はとても細く、人間とほとんど同じ容貌をしていました。よく観察し、すぐ

近くに寄らない限り、彼らが人間でないと気付くことはないでしょう。頭髪はありませんでした。虹彩は人間のそれとは異なっていて、ほとんど猫の目のようでした。

3 番目の ET は EBEN（イーブン）に似ていましたが、それよりは大きな身体を持っていました。そのときはただ映像を見せられただけでしたが、その後 1985 年に受けた説明の中で、私はこの生物が EBEN により遺伝子操作でつくられたものであることを知りました。

スティーブン・グリア：彼らは、それが遺伝子操作でつくられたものだと感じたのですか？

リチャード・ドーティ：彼らは知っていました。どのようにして知ったのかは分かりません。彼らは、それを私たちに教えませんでした。

スティーブン・グリア：あなたたちは、集積回路と一体化した神経組織の情報にまで「読み込まれた」のですか？

リチャード・ドーティ：いいえ、いいえ。

スティーブン・グリア：これらの（*EBEN とは）異なる ET 種族の宇宙機についてはどうですか？ どのような宇宙機でしたか？

リチャード・ドーティ：宇宙機に関しては、一つが葉巻形でした。長さは 60 フィートから 70 フィート（*18 メートルから 21 メートル）、幅は 20 フィートから 30 フィート（*6 メートルから 9 メートル）ありました。その次が通常の円盤形で、本当に幅が広がったのはこれのみでした。それは子供が遊ぶ、ある種のコマに似ていました。大佐の説明では、彼らはこの宇宙機がどのようにして飛ぶのか、まだ解明できていないということでした。彼らはその写真を撮り、詳しく観察もしましたが、実際にそれを撃墜したのかどうかは分かりません。少なくともその時点では分かりませんでした。彼らもそれを説明しませんでしたので。3 番目の宇宙機はとても小さく、大きさはフォルクスワーゲンほどでした。形は卵形で、EBEN（イーブン）の宇宙機によく似ていましたが、それよりは遥かに小さな宇宙機でした。座席は一つで、おそらく観察用または偵察用だったと思います。説明されたのはこれだけです。

スティーブン・グリア：彼らは、実際にそれらの写真を見せたのですか？

リチャード・ドーティ：はい。映像には、これらの生物と宇宙機の写真がありました。日付はなく、始まりは 1940 年代か 1950 年代でしたが、説明が進むにつれて時代はより新しくなりました。そのことは、映像の中で見せられた様々な情報から分かりました。これらの宇宙機は映像の後半にありましたが、民間人により撮影されたマクミンビル UFO（*1950 年にオレゴン州マクミンビルの農場で撮影された UFO 写真）のように、ヒストリーチャンネルで見たことのあるものに似ていました。そのうちの一つは、確かにマクミンビ

ル UFO にそっくりでした。マクミンビル UFO のことはよくご存じかもしれません。1950 年か 51 年のことだと思います。

[3]

=====
スティーブン・グリア： そうです。このときの説明会や後日の説明会の中で、ET による脅威とは何か、彼らは何を心配していたのか、それについての説明はありましたか？

リチャード・ドーティ： はい。第一に関心を持たれたのは、彼らの狙いは何かということでした。侵略前の偵察飛行なのか？ 彼らは着陸し、ある目的を持って何か特定の施設を奪うつもりなのか？ 鉱物が不足しているのか？ なぜなら、映像（*‘ヤンキーブラック’プログラムの説明映像）の最後の方で、最近これらの宇宙機の多くが、ウラン鉱山などの鉱区で目撃されているとたびたび説明されていたからです。一体彼らは何を求めているんだ？ 彼らはウランを手に入れ、プルトニウムに変換するつもりなのか？ ですから、私たちの仕事はそれを調査し、何らかの脅威があるのかどうかを決定すること、もし脅威があるならその報告書を指揮系統に上げることでした。

スティーブン・グリア： 彼ら（*ET）のテクノロジーは核兵器の力を少し超えていたように思いますが、こうした ET の飛来事件は、私たちが原子爆弾を開発したことと関係がありますか？ 当時ロズウェルには、世界で唯一の原子爆弾航空群と共に、ウラン鉱山などもありました。ディスクロージャー・プロジェクトの証人の一人、デッドリクソン大佐によれば、私たちのあらゆる核関連施設が ET 側の偵察対象になっていました。そのことは議論されましたか？

リチャード・ドーティ： 当局者はそれを察していましたし、懸念もしていました。なぜなら、大佐が何を言ったにせよ——彼はそのとき彼自身が感じていたことの一部を言ったのだと思いますが——私たちはある国に 2 個の原子爆弾を投下したばかりでしたし、その数週間前には、ニューメキシコ州でその核兵器を試験しました。これらの異星人は、おそらくどこかでこれを観察していたのです。彼らがすでに当時から偵察を行っていたのか、またどのようにしてそれを知ったのかは別にしてです。ですから、彼らは観察し、事態を把握するためにやってきました。おそらく、そのような兵器を持っていなかった彼らは、それを手に入れたのです。そして、おそらくある理由により、この地球の状況を心配し、それらの兵器を追跡していたのです。これは憂慮すべきことでした。なぜなら、米国空軍には大量の核兵器があり、その警備は空軍の最優先事項だったからです。OSI（AFOSI；空軍特別捜査局）の主要任務の一つは、核兵器を脅威から守るための防諜作戦でした。カートランド空軍基地には、大量の核兵器がありましたし、当時ニューメキシコ州には、ロズウェルに第 509 爆撃航空群がありました——当時は米国で唯一の核攻撃部隊でした。

[4]

=====
スティーブン・グリア： そのとおりです。ところで、1979年と1985年の説明会に続く、別の説明会はありましたか？ あなたの勤務中、さらに更新された情報はありましたか？

リチャード・ドーティ： 私たちが何かの調査を行なっているとき、それについて説明を求めたことはありました。なぜなら、すべてを知っていたわけではなかったからです。私たちは歴史的なことを含め、調査を行なうために必要な十分な知識を与えられました。1981年のことだったと思います。一人の空軍科学者が亡くなりました。彼は古びた陸軍トランクを一つ残していきましたが、中にはコロナでの墜落で死亡した生物の検視解剖写真が詰まっていた。私たちは彼の遺品を回収しに行ったのですが、見たところそれは人間のようではありませんでした。医師がそれを見たなら、それが本物の検視解剖写真だと分かったはず。私には少しばかり医学の知識がありますので、取り出されていた臓器を見てこう言ったのです。“これは心臓のように見えない……これは肺ではなさそうだ” 私たちが気付いたのは、これらの EBEN（イーブン）は心臓と肺から成る、ただ一つの器官を持っていたことです。それは単一の器官でした。彼らは、異なる消化機能を持つ1対の胃を持っていました。また、食べたどんなものからでも最後の一滴まで水分を吸収し、体内に取り込むための器官もありました。ですから、彼らは実際には水をたくさん飲む必要がなかったのです。

私はこれらの遺品を回収し、すぐに機密扱いにしました。そして、これは人間なのか、そうでないのかと、説明を求めたのです。それぞれの写真の下端には事例番号と日付が入っていました。日付は1947年9月でしたが、事例は私が憶えていた（見覚えのある）事例番号ではありませんでした。結局、私は医師でもある一人の科学者から説明を受けることになりました。彼は、ワシントン D.C.にある軍病理学研究所から来た学者で、私たちにいわば ET 解剖学の入門編を教えてくださいました。彼は、これらがコロナでの墜落に由来する解剖写真だと確証したのです。

スティーブン・グリア： 彼らはさらに詳しい説明をしましたか？ 脳や生殖器など、他の器官についてはどうでしたか？

リチャード・ドーティ： 人間に脳葉が幾つあるのか覚えていませんが、EBENの脳には異なる11の脳葉がありました。脊髄は脳につながっており、その接合部の両端には二つの小さな球（*bulb；球形または紡錘上の構造）がありました。しかし、その球が何なのかはついに解明することができませんでした。私たちのものとは違っていましたから。目はとても複雑でした。視神経がありましたが、それらは脳の様々な部位につながっていました。あたかも、何か特別な理由により、目が脳の様々な部位を使って機能しているかのようでした。

スティーブン・グリア： とても興味深いですね。生殖器についてはどうですか？ 性別について、彼らは何かを感じ取りましたか？

リチャード・ドーティ： その類のことは何も説明されませんでした。それらの中に女性はいませんでした。EBEN（イーブン）は一度、女性もいることを彼らに話したと思いません。しかし、これらの宇宙機に女性は乗っていませんでした。

スティーブン・グリア： すべて男性だったのですか？

リチャード・ドーティ： はい。すべて男性でした。

スティーブン・グリア： ペニスがありましたか？

リチャード・ドーティ： はい。すべての EBEN にはペニスがありました。EBEN は一つの生殖腺（reproductive gland）を持っていましたが、彼らはそれをペニスとは呼ばず、生殖腺と呼んでいました。生殖腺は体内にありました。おそらく、適切なときに外に出てくるでしょう。彼らはそう推測しました。

EBEN（イーブン）の筋肉は驚くほど筋（すじ）が多く、特に脚はそうでした。脚は太くはありませんでしたが、頑丈でした。筋が多かったため、私たちの筋肉よりも強靱だっただろうと思います。彼らに耳はありませんでしたが、1 個の器官または腺——彼らはそれを小球（little bulb）と呼んでいたと思います——を伴った管（canal）がありました。彼らはこの小球を、音を聴くための器官だろうと考えました。しかし、EBEN に私たちのような声帯はありませんでした。私は、とても興味をそそるある報告書を読みましたが、それにはこう書いてありました。彼らがこの生物を見つけたとき、彼（*生物；EBEN）は手振りでのやりとりしかできませんでした。彼がロスアラモスの医療施設に運び込まれて検査を受けたとき、医師たちは検査しているものが何なのかを知りませんでした。最終的に、私たちは手話でやりとりすることができるようになりました。後になって、誰かが声帯手術をするか、そこに何かを挿入して声を出せるようになる方法を見つけました。こうしてその生物は、声を出せるようになったのです。どのような方法なのか、私には分かりません。

スティーブン・グリア： この生きていた ET は、彼らがどうやって意思のやりとりをしているか、説明したことがありましたか？

リチャード・ドーティ： それについて直接に説明されたことはありません。私は何年も後になって知ったのですが、EBEN はテレパシーで意思のやりとりをしていました。

スティーブン・グリア： EBEN との意思のやりとりに熟達した人はいましたか？

リチャード・ドーティ： この EBEN（イーブン）には、一人の空軍大尉が付いていました。彼は言語学者でした。彼が幾つの言語を話したのかは分かりませんが、情報将校でもあり

ました。彼は誰よりもすぐれた対話能力を生かし、EBEN とは実に親密な関係を築くことができました。実際に彼は、EBEN が死亡するまで 3 年か 4 年一緒に暮らしました。

[5]

=====
スティーブン・グリア：当時この問題に関わっていた他機関の名前、プロジェクトのコード番号やコード名を知っていますか？

リチャード・ドーティ：国防情報局（DIA）はこれに深く関与していました。私たちが OSI（AFOSI；空軍特別捜査局）本部に上げる報告はすべて DIA に行き、トム・マックという名前の人物に届けられました。トム・マックが、DIA におけるこのプロジェクトの責任者でした。

プロジェクト名は様々でしたが、その幾つかには軍の通信用アルファベットが使われました。たとえば Quebec（ケベック）です。私たちが無線で話すときは Q を Quebec と言います。'Quebec の Q' というようにです。ですから、私たちはある特定の作戦を表すのに、まず通信用アルファベットを使い、その後地区番号、たとえばカートランド空軍基地の OSI なら 17 を付け、さらにその後事例を表す通し番号を付けます。

しかし、もしピース空軍基地に行ったなら——私はピース空軍基地に行きました。そこはニューヨーク州北部（*ニューハンプシャー州）にある戦略空軍（SAC）基地でしたが、今はありません（*1991 年 4 月に閉鎖）。ここでは、核兵器貯蔵区域の周辺を UFO が飛び回り、実際に着陸したとき、とても奇妙な事件が起きました。核兵器が 1 個、ばらばらに分解されているのが見つかったのです。核弾頭は盗まれてはいませんでした。ばらばらに分解され、取り出されていました。バンカー（掩蔽壕）に、そのようなことをする人間はいませんでしたので、彼らはそれを、おそらくロシアの仕業だろうと考えました。私も現場に行きましたが、この作戦中に痕跡を発見したのです。指紋です。しかしそれらは、人間の指紋のようではありませんでした。とてもとても奇妙な指紋でした。私が最初に ET の説明を受けたとき、1 本の腕に二つの手（*腕から飛び出した部分）を持つ生物の写真を見せられたと話したことを覚えていますか？ そのような何者かが（*バンカーに）侵入したようでした。そこは警備厳重な場所でしたので、どのようにして侵入したのかは分かりません。しかし、侵入しました。だからこそ、私たちはそこで指紋を発見したのです。それは私たちが政府として初めて、実際に ET の指紋を手に入れた事件でした。

スティーブン・グリア：それはいつのことですか？

リチャード・ドーティ：1984 年のことです。冬でした。冬の初めだったか終わりだったかは思い出せませんが、雪がありましたからね。ニューヨーク州の北部ですから。その事件は大変興味深いものでしたが、彼らが侵入して指紋を残したということ以外は、何も分からずじまいでした。ところで、核兵器やその管理施設周辺で UFO が目撃された事件は、

枚挙にいとまがないほど多くありました。例を挙げれば、エルズワース空軍基地（*サウスダコタ州）、マルムストローム空軍基地（*モンタナ州）など、核兵器が配備されていた当時の SAC（戦略空軍）基地です。

スティーブン・グリア： デッドリクソン大佐は、事実上あらゆる核施設だと言っています。

リチャード・ドーティ： そうです、そうです。事実上あらゆる施設だと述べている報告書を、私も読みました。しかしその幾つかは、何かが周囲を飛び回っているのを警護隊が目撃しただけの事件よりも、さらに厄介でした。区域内で生物が見つかったというようなことです。それを私たちは、1980年にカートランド空軍基地で経験しました。核兵器が貯蔵されていたマンザノ複合施設の警護隊が、コヨーテキャニオンで奇妙な光体を目撃しました。そこはマンザノの東にあります。そして何かが着陸しました。そのため、私は大掛かりな調査を実施したのですが、それが結局はポール・ベネウィッツ事件への入り口になりました。

スティーブン・グリア： それは一体何のことですか？ 何が起きたのですか？

リチャード・ドーティ： ポール・ベネウィッツのことですか？ それとも？

スティーブン・グリア： 両方です。

リチャード・ドーティ： 分かりました。

[6]

=====

スティーブン・グリア： 私はコヨーテキャニオン事件の文書は幾つか見たことがあります。また、その少し前に起きた、警備員が1機の円盤を見た事件についても……

リチャード・ドーティ： サンディア研究所（*サンディア国立研究所）の警備員の一人が、深夜勤務に就いていました（*マンザノ複合施設もサンディア研究所も、カートランド空軍基地と同じ区域にある）。彼らが自前で抱える警備員です。未明2時過ぎの巡回ドライブをしていたときのこと、彼は1機のET宇宙機がバンカー（掩蔽壕）に着陸するのを見ました。バンカーには何もありませんでしたが、ET宇宙機は着陸しました。それが着陸すると、車の電子機器がすべて停止しました——エンジン、彼の携帯無線機、車載ラジオ——その宇宙機が着陸している間中、それは続きました。宇宙機が飛び去ると、あらゆることが正常に戻りました。実際に何かが着陸したのかどうかを調べるために、私が呼ばれました。私たちが知ったのは、何かが着陸したということだけでした。

スティーブン・グリア： 基地のレーダーには映りましたか？

リチャード・ドーティ：基地のレーダーには何も映っていませんでした。私が最初にしたことは、FAA（米国連邦航空局）への問い合わせでした。当時基地には、ほとんど誰にも知られていない秘密の部署があり、基地の中または周辺で発生した可能性のある、あらゆる無線の周波数を監視していました。私は彼らの所に出向き、問題の時刻に変わった周波数を捉えていないかと訊きました。彼らは何も捉えていませんでした。それで私は FAA に行き、この夜の印字出力結果を見せてほしいと頼みました。やはり、異常はありませんでした。私は、彼らをごまかしているのかもしれないと考え、次にはマンザノ内部の保安警察にも個別聴き取りをしました。しかし、まったく同じ答えが返ってただけでした。

これはまず間違いなく作り話だろう、だから調査しても着陸した宇宙機については何も分からないのだ、私はそう思いました。しかし程なく、マンザノを警護している第 1608 保安警察中隊の指揮官、アーニー・エドワーズ少佐が私のところに来て、こう言ったのです。“ポール・ベネウィッツと名乗る人物から電話を受けた。彼は基地のすぐ外側、フォーヒルズ（*基地に隣接した住宅地）に住んでいる。彼は、マンザノ付近に奇妙な光体を幾つも見た、種類は実に様々だと言っている”

私は、それは妙だなと言いました。私がポール・ベネウィッツのことを調べ始めて分かったのは、彼が会社を持っているということでした。サンダー・サイエンティフィック・ラボラトリーズといい、カートランド基地のメインゲートを出てすぐの所にありました。彼らは、潜水艦用の温度センサーをつくっていました。ですから、彼は政府の契約業者であり、機密取扱許可も持っていました。私はポール・ベネウィッツの目撃談を聞くために、彼の家を訪れました。こうして彼は私に、自分が何を見たのか、何をしたのか、それらの光体が何であると考えているのか、そのすべてを語り始めたのです。

私たちは、彼がロシアのスパイでないことを確かめるために、身元調査をしました。彼の家は、文字どおり基地の境界からほんの数フィートしか離れておらず、裏庭のすぐ突き当りが基地の塀になっていました。彼は物理学者で、中庭には複雑な先端機器が幾つも置かれていましたし、上階にある寝室のテラスも基地に面していました。私たちはこうしたことを懸念したのです。私たちだけではなく、NSA（国家安全保障局）も彼の身元調査をしました。なぜなら、彼は基地で進行中だった NSA の機密プロジェクトについても知っているように思われたからです——そのプロジェクトは今ではもう機密ではないと思いますが、かつては機密扱いでした。それは知られてはならないものでしたが、彼は知っていました。彼はとても頭の良い人物でした。

ですから、彼の行為を止めさせる方法を考える必要がありました。私たちは徐々に彼を、見たものが UFO、ET であると確信するように——確信というのではなく、そうかもしれないと思うように仕向けていきました。そして彼は、そのような考えに走っていきました。私が多くの批判を浴びていることは知っています。彼にあらゆる偽情報を与え、気を狂わせた。

しかし、ポールの考えはその多くが彼自身のものでした。私がそう仕向ける必要はなかったのです。彼にそれが UFO だと確信させることは、私にとり難しいことではありませんでした。彼自身が、それを UFO だと私に言ったのです。数年後、私は彼と友達になりました。私は、彼がまだ考えを変えていないことを聞き出したうえで、あれは UFO ではなかったと説明しました。しかし、彼はまったく私を信用しませんでした。結局、彼は気が狂い、その数年後に亡くなったのです。

しかし、ポールは奇妙な光体（オーブ）の写真を何枚か撮ったと言っていました。実際に、私はある夜、ジェリー・ミラー、スティーブ・アツツアと共に夕食に招かれ、ポール・ベネウィッツの家に行きました。ジェリー・ミラーは何年か前までプロジェクト・ブルーブックの調査官をしていましたが、そのときはカートランド空軍基地の諜報部にいました。私たちの側ではなく、別の機関の職員です。スティーブ・アツツアはもう一人の諜報員です。私たちは夕食を取ったばかりで、この部屋と同じほどの広さの、とても天井の高い部屋でコーヒーを飲んでいました。幾つかのテーブルライトだけが点いていて、天井の照明は落とされていました。冬の夜の 8 時か 9 時頃です。ポールは私たちに、目撃したものについて説明していました。そのとき私は、部屋の隅に突然 1 個のオーブ（光球）が現れたのを見たのです。私はそれに目を凝らし、観察しました。最初、私以外は誰も気付いていないようでした。私が隣のジェリーに肘で合図をしたら、ジェリーも目を上げてそれを見ました。ポールには何も言いませんでした。そのオーブは部屋の中を飛び始めました。ポールも当然それを見ました。そして、こう言ったのです。“ええ、そこにいますよ”

私たちは、一体これは何だ？と思いつつ眺めていました。おそらく 20 秒間ほどは見ていたでしょう。その後、オーブは元の場所に戻り、消えました。ジェリーは、ポールがその現象を引き起こしているのだと考えました。ジェリーはポールに向かって、何をしたんだと訊きました。ポールは、何もしていないと答えました。ジェリーは、調べてもいいかとポールに訊き、ポールは、どうぞと答えました。ジェリーも科学者でした。ジェリーは辺りをくまなく調べましたが、どうすればポールにそれが可能なのか、見当もつきませんでした。それは周囲に少し火花を放っている光球でした。ポールはこう言いました。“これはエイリアンたちの仕業です。これが彼らの偵察機で、こうして彼らは私を見張っているのです”

数週間後、私たちはポールの家にいました。ポールは不在でした。人々は私たちが玄関を壊し、無断で押し入ったのだと言いますが、そうではありません。ポールは私たちに、必要なときに入れるようにと言って、家の鍵を渡していたのです。ですから、搜索令状のようなものもありませんでした。私たちが中に入ると、1 個の小さなオーブが壁を焦がして穴を開け、隣室に入っていくのが見えました。私たちは 2 週間後にそこに戻り、見たことをポールに話しましたが、その焦げ穴はまだそこにありました。

私たちは最初、ポールが幻覚を起こしているのだと思いました。しかし調べるにつれて、これには何かがあると考えざるを得ませんでした。彼は実際に、ET の写真を撮っていました。ET つまり生物そのものの写真はそれほど多くありませんでしたが、彼らが人間に対し

て偵察や実験を行なうときに使用する小さなオーブ（光球）の写真は少なからずありました。彼はその写真の束、何枚かは覚えていませんが、それを持っていました。彼はキャノンの 35mm カメラを持っていましたので、私は彼にこう言いました。“もし UFO の写真が撮れたなら、現像せず、我々にそれをさせてほしい” 彼は承諾しました。

ある日、彼は私に電話をよこし、基地上空の UFO を撮ったフィルムが 1 巻あると言いました。私は出かけて行ってそれを受け取り、基地の安全な暗室に持ち込みました。そして、私たちの安全な現像専門家にフィルムを渡し、現像させたのです。私は写真のサイズをあれこれ注文しながら、そこでずっと待っていました。1 時間後、彼は写真を持って出くると、こう言いました。“一体何ですか？ これらの物体は” アルバカーキ国際空港は、滑走路をカートランド空軍基地と共用しています。それらの写真には、着陸を始めた飛行機の上を飛ぶ、卵形の宇宙機が複数写っていました。つまり、これらの商用機は ET 宇宙機が真上を飛び回り、飛び去って行く中を進入していたのです。

スティーブン・グリア： それらはオーブ（光球）に近かったですか？ それとも、はっきりした構造を持っていましたか？

リチャード・ドーティ： オーブではありません。それらははっきりした構造を持っていました。写真が何枚あったかは覚えていませんが、それらは構造を持つ宇宙機でした。私たちは、腕の立つその専門家に画像を引き伸ばしてもらいました。その結果、宇宙機はコロナ機（*冷戦期の偵察衛星、いわゆる‘コロナ衛星’のことか。空軍が深く関与していた）ほどの大きさであることが分かりました。

スティーブン・グリア： 細部まで分かりましたか？

リチャード・ドーティ： もちろん、細部まではっきりと分かりました。これらはカラー写真でしたが、その中に注目すべき 1 枚がありました。宇宙機の底部から青い光のようなものが噴き出していたのです——おそらくエネルギー装置だろうと思います。私たちはそれらの写真を本部に送りました。その後どうなったかは知りません。

スティーブン・グリア： それらは継ぎ目のない機体でしたか？

リチャード・ドーティ： ええ、継ぎ目はありませんでした。

スティーブン・グリア： 他にビデオ（動画）のようなものはありましたか？ すべて写真でしたか？

リチャード・ドーティ： すべて写真でした。ポールはビデオを撮りませんでしたから。しかし、私たちはビデオを持っていました。というのは、ブラシタス（*アルバカーキの北北西約 20km）に住むある人物が基地にビデオを持ち込んだからです。そこはアルバカーキから北に行った山の中でした。彼は空軍の退役軍人で、パイロットだったと思います。

彼はビデオカメラを使って、動物の観察をしていました。辺鄙な地区に住んでいて、ビデオカメラを設置してある家の裏庭には、鹿やエルクがよく現れました。彼はアマチュア野生生物写真家でした。

しかしある夜、彼は物音を聞いて外に出ました。そうしたら、裏庭の真上に宇宙機が滞空していたのです。彼はそれをビデオに撮りました。その宇宙機が飛び去るまでの時間は、28秒かそこいらでしたが、正真正銘のビデオはそれだけです。私たちはそのビデオとカメラを預かりました。分析にはすべてが必要だからです。そしてそれを本部に送りました。本部はカメラ代金の小切手を送ってよこしました。彼らはそのカメラを返したくなかったのです。彼（*アマチュア野生生物写真家）はビデオのコピーが欲しかったのですが、それは叶いませんでした。彼らはそれを機密扱いにしました。私たちの送ったものがその後どうなったのかは知りません。

スティーブン・グリア：具体的に、どこに送ったのですか？

リチャード・ドーティ：OSI 本部です。空軍特別捜査局 (Office of Special Investigation) です。当時はボーリング空軍基地 (*ワシントン D.C.にある空軍基地。基地の統廃合により、現在はアナコスタシア-ボーリング統合基地の一部になっている) にありました。私たちはそれを本部の IVOE に送りました。IVOE は防諜担当部署のある場所です。さらに、彼らはそれを NSA (国家安全保障局) に送りました。

[7]

=====
私とその理由を知ったのは、何年も経ってからでした。それは私が退職した後のことです。私は元諜報員や退職諜報員などで構成される、とても結びつきの強いグループに加わっていました。再会つまり会合は毎年ありますが、私自身は毎回参加していたわけではありません。参加したのはおそらく 25 年間で 20 回ほどでしょう。会合は通常、ラフリン (*ネバダ州) での UFO 大会の前後に持たれました。今はアリゾナ (*2011 年にアリゾナ州フェニックスに移った) ですが、当時はラフリンでした。私たちは盗聴される心配のない、そこそこ安全な場所に座りながら、互いに知っていることを語り合います。私がいろいろなことを学んだのは、私が知らなかったプログラムの説明を受けた人々がそこにいたからです。

その中に NSA (国家安全保障局) 出身の諜報員が一人いました。彼に最初に出会ったのは 1994 年か 1995 年だったと思います。それ以前には会ったことはありませんでした。彼はこう言いました。“ずっとあなたに会いたいと思っていました。あなたと私は一緒に同じ事件に取り組んでいましたから” 私は、何の事件かと訊きました。彼は、ポール・ベネウィッツだと言いました。私は、ポール・ベネウィッツ？ どういう意味ですかと訊きました。彼は、自分たちも彼に面会したのだと言いました。つまり、彼らも調査をし、私たちも調査をしながら、双方ともそのことを知らなかったというわけです。

ある夜、私たちはポール・ベネウィッツの家に行きました。雨が降り、冬のような秋の夜でした。私とジェリー・ミラーがいて、ポールは私たちに様々なことを見せていました。ポールは私たちのところに来て、こう言いました。“通りの向かい側に家が見えますね？ この家の正面です” 私は頷きました。彼は、2階の窓に小さな明かりが見えるかと訊きました。私は、見えると言いました。すると彼は、あの家は空き家だから、明かりが見えるはずはないと言うのです。私は、それはおかしいなと言いました。あそこにいるのは誰なんだ？

私は銃を携帯していましたので、階段を降り、こっそりと辺りを探りました。そして、裏庭に隠れて駐車している2台の車を見つけたのです。実際には1台は庭にありましたが。私はこれらの車のナンバーを控えました。翌日、私は中に入りたくはありませんでした。彼らは家を買いに来ていたのだろう、とも考えたからです。それでナンバープレート調べたら、車はハーツ（Hertz）レンタカーのものでした。デンバー（*コロラド州）の会社だったと思います。彼らは政府のクレジットカードで借りていました。私は手がかりを掴んだと思いました。

それが1週間後だったか2週間後だったかは分かりませんが、私たちは同じ時刻にそこにいました。やはりその空き家の窓には小さな明かりが見えました。くすんだ赤色で、これはカメラのライトだと分かりました。つまり、カメラがこちら側を向いていたのです。よし、今日は彼らを捕まえよう、私はそう言いました。私はアルバカーキ警察署に電話をし、こちらの状況を伝え、誰かをよこしてくれるように頼みました。警察がやってきて、私たちはこの二人の男たちと対面することになりました。彼らは、自分たちが特別捜査官で、この場所を借りているのだと言いました。彼らが言ったのはそれだけで、所属機関は言いませんでした。これはやや私の管轄外のことだったので、あとは警察に任せました。警察はID（身分証明書）の提出を求め、彼らがその場所を借りていることを確認しました。この件はこれでおしまいでした。

しかしこの（*NSA 出身の）諜報員は、何年も経ってから私にこう言いました。“私たちはあの事件を調査していたのです。スプリングアー（*ニューメキシコ州、アルバカーキの北西約100km）で起きた誘拐事件も調査しました” 私はそのことを知りませんでした。ですから、NSA（国家安全保障局）もこれ（*ポール・ベネウィッツ事件）には深く関与していたのです。

スティーブン・グリア：他にどういう機関の、どのような人々がいましたか？

リチャード・ドーティ：DIA（国防情報局）がいましたし、もちろんCIA（中央情報局）もいました。私たちのグループに、CIA出身者はかなりいました。彼らは現場で仕事をすることがありません。なぜなら、彼らにそのような仕事はできないからです。彼らは私たちが与える大量の情報を頼りに、分析調査を行っていました。もちろん、FBI（連邦捜査局）もそれに関わっていました。

彼らが持っていた唯一の物体は、1 個の円筒でした。箱ではありません。EBEN（イーブン）の宇宙機にあった 1 個の円筒です。様々な場所で分析されましたが、それがサンディアにありました（*サンディア国立研究所の施設は国有だが、管理運営主体は民間。2017 年 5 月以降は、ハネウェル・インターナショナルの完全子会社 NTESS が運営している）。

1984 年にレーガン大統領がサンディアにやってきて、特別にこれ（*円筒）について説明を受けることになりました。私はたまたま警護隊の一人だったので、大統領への説明が行なわれていたとき、その部屋に居合わせました。彼らはその物体の断面図を持っていて、それをオーバーヘッド・プロジェクターで映し出していました。彼らがどのようにしてその構造を知ったのか、X 線でも使ったのか、私には見当もつきません。彼らは大統領に、これらの物体が持っていると思われる機能について説明していました。それは多目的航空電子装置で、EBEN にとってのナビゲーション装置でもありました。それが、サンディアが関わっていることを私が知った、唯一のテクノロジーです。

スティープン・グリア： こうした様々なプロジェクトや情報に、レーガン大統領がどこまで読み込まれていたのか、知っていますか？

リチャード・ドーティ： 私たち元諜報員グループの一人で、何年か大統領警護官を務め、その後 CIA（中央情報局）に行った人がいます。その彼が、私たちにこんなことを言いました。レーガンについてとても興味深かったことの一つは、彼が 1981 年 1 月 20 日に大統領に就任すると、すぐに説明を求めたことだと。そのときはまだイランに人質がいましたが、レーガンはその問題に取り組む前に、こう言ったというのです。“UFO について我々が知っていることをすべて説明してほしい” レーガンは、大統領執務室に座ってそう言いました。彼らはこう返答しました。“承知しました、大統領。すぐにそのようにします” ですから、彼は知っていました。彼はそこで説明を受けたわけではありませんが、それを知っていました。

私は、今でもまだ幾分機密扱いになっているある仕事をしたことで表彰を受けることになり、ワシントンに行ってレーガン大統領に会いました。私からはその件について大統領に話したことはありませんでしたが、彼は何かを知っていました。なぜなら、彼はこう言ったからです。“あなたはそこで、とても興味深いことに取り組みましたね” それが、彼が言ったことのすべてです。私たちにそれほど時間はありませんでした。大統領執務室にいたのは 2 分とか 5 分とか、そんなものだったと思います。彼は私に大統領カフスポタンをくれました。彼は実際に何かを言ったわけではありませんが、私には彼が何の話をしているのかが分かりました。こうして私は、自分のしていたことが大統領にまで報告されていたことを知ったのです。それは私にとり、嬉しいことでした。

[8]

=====
1988年10月に放映された、'UFO 隠蔽？ ライブ！（UFO Cover-up? Live!）'というライブ番組があります。どのチャンネルだったかは覚えていませんが。その1年前の1987年8月、私とキット・グリーン博士、ハル・パソフ博士、アーニー・ケラーストラス、カール・デールなど数人、それにロバート・コリンズがオハイオ州デイトンに行き、ある部屋で会合を持ちました。この'UFO 隠蔽？ ライブ！'のプロデューサーもそこにいました。彼は私たち全員にインタビューをしたいと思っていました。しかし、ほぼ全員が断りました。私は、何を話してほしいのかと訊きました。彼は、UFOのことだと言いました。私は、カメラの前で話すつもりはないと言いました。こうして私たちは、インタビューをするためにホテルの一室に座りました。最初、彼は私に質問のリストを渡し、こう言いました。“まず質問を読んでください。その中に何か問題のある質問はありますか？” 私は、問題のある質問はないと答えました。実際には、私が話せないことが幾つかありました。三つか四つだったと思います。ともかく、インタビューが始まりました。そこには一人のカメラマンと彼がいました。彼はこう言いました。“カメラのスイッチを切りますので、もっと詳しく話してください。つまり……………” 彼は、私に何を話してもらいたいかを言おうとしていたのです。

すぐに私はこう言いました。“私はあなたのゲームには付き合いません” 私が話すのは、私が知っていること、私がしたことだけだと。それ以外は言うつもりはない。機密事項も言わない。私はカートランド事件と自分で見たことは話す。だが、それだけだと。

彼は私を後ろに下げ、さらに5分間ほど、私が述べた以上のことをいろいろと喋りました。彼が私へのインタビューを再開したので、私はこう言いました。“あなたは一体何を知っているんです？ 私はこれで終わりにします” 私は部屋から出ました。さて、放映された UFO ライブ番組ですが、私だということになっている何者かを登場させました。最初の30秒間ほどは、黒塗り（*シルエット）されてはいたものの、確かに私でした。しかしそれ以外は、すべてが吹き替えでした。私の代わりに誰かが喋っていたのです（*スティーブン・グリアが大笑い）。これは本当に私を憤慨させました。もちろん彼らは、私がライブに出ていたと言います。あなたはそこでライブに出ていたと。それはあり得ません。私はその期間、サンタフェ州立警察学校に行っていたからです。私は（*1980年）8月1日に州立警察学校に入り、12月に卒業するまでそこにいました。その当日の夜は寮に隔離されていましたので、それに出演するどころか、観ることさえできませんでした。ですから、あれはでっち上げ、すべて作りごとです。

誰が私の吹き替えをやっていたかですが、実をいうとそれはロバート・コリンズだったと思います。ほぼ彼に間違いありません。ところで、ロバート・コリンズと私は友達ではありません。絶対に友達ではありません。彼は2006年に私の名前を使って一冊の本（*'The Black World of UFOs: Exempt from Disclosure'）を出しましたが、私はその本に一切何も書いていません。

スティーブン・グリア： それはよかったですね。

リチャード・ドーティ： 人々は、私が本を書いたと言います。しかし、私は本を書いたことはありません。私はその本のために、彼に情報を提供しました。しかし、そのうちの 20 パーセントだけが本に掲載され、残りは掲載されませんでした。その本は今見ることができませんが、事実に基づく内容はおそらく 20 パーセントほどでしょう。その 40 パーセントか 50 パーセントは憶測、そして残りは完全な嘘です。つまり、作り話です。

[9]

=====

私は任務で何度かネバダで過ごしました。そこでは、逆行分析（リバース・エンジニアリング）が行なわれていました。私はそのことについて、一度も説明を受けたことはありません。しかし、常識で考えて、そこにあったこの宇宙機は私たち（*地球人）がつくったものではないと思いました。そうでなければ、彼ら（*ET）が設計した何かをベースにしたものだったでしょう。その唯一の例が、1980 年のキャッシュ-ランドラム事件です（*ベティ・キャッシュ 51 歳、ビッキー・ランドラム 57 歳、ビッキーの 7 歳になる孫コルビー・ランドラムが遭遇したのでそう呼ばれている）。私はそれが事実であったことを知っています。なぜなら、私はそれに巻き込まれたからです。その地球製航空機は空軍パイロットにより操縦されていました。その機体は、地球にあった ET 宇宙機をベースにしてつくられていましたが、推進システムに不具合が生じ、放射線を撒き散らしました。私はそれを事実として知っています。それが、私が知っている唯一の逆行分析です。サンディアにあったあの円筒も逆行分析され、F-117（*独特の多面体形をしたステルス攻撃機、愛称はナイトホーク）に組み込まれたと理解しています。

私はネバダ実験場にいました。今そこはネバダ国家安全保障施設（NNS）になっています。エリア 51 と呼ばれている場所は、当時 DET-3 実験センターでした。私がそこにいた 1980 年代には、エドワーズ空軍基地（*カリフォルニア州）の DET-3 実験センターと呼ばれていました。そこには、エドワーズ空軍基地からエリア 51 に派遣された、実験要員の分遣隊がいました。ご存じのように、エリア 51 は地図上ではネバダ実験場に隣接する一つの小区画です（*多くのエリアに分割されているネバダ実験場の一部ではない）。人々はそこをグルームレイク複合施設と呼びますが、実際には二つの異なる場所からなります。つまり、DET-3 実験場（*エリア 51）とグルームレイクです。これらは異なる二つの場所ですが、人々はときどき混乱し、それらを同じ場所だと考えます。それから、補助的な実験場としてパプス（*エリア 51 から南に約 16km）がありますが、そこに地下への入り口があるのです。

スティーブン・グリア： そこに入ったことはありますか？

リチャード・ドーティ： もちろんあります。私はすべての場所を見てきました。私は防諜要員として、そこで 9 箇月間を過ごしました。エリア 51 には、ソ連の衛星が上空を通過

するときレーザーを発射し、その搭載カメラの目を眩ます施設がありました。写真を撮らせないようにするためです。ロシアだけではありません。上空に来たどの衛星に対してもそうしました。ですから、その時期にエリア 51 の写真を撮ることは、とても困難でした。今もその施設があるかどうかは知りません。私がそこにいたのは、遙か昔ですから。

スティーブン・グリア： それはいつのことですか？

リチャード・ドーティ： 1981 年、そして 1985 年です。

スティーブン・グリア： あなたがその施設にいたとき、地球人がつくった、つまり逆行分析（リバース・エンジニアリング）の技術でつくられた物体を何か見ましたか？ 電磁重力とも反重力とも呼ばれるシステムを使った物体のことですが。

リチャード・ドーティ： はい、一度見ました。それが反重力機だとは誰からも教えられませんでした。それが作動する様子、それが単独で上昇する様子を見て、そう思いました。私たちはそれを観察し、そうに違いないと思いました。私は技術者ではありませんが、常識で考えて、それは反重力以外の何物でもないと思いました。しかし、その機体は実際には異星人の宇宙機だったと思います。逆行分析の技術でつくられたものではなかったと思います。

そこには、異なる二つの複合施設があります。一つはラザール（*ボブ・ラザール）が語っていた、異星人の宇宙機のある施設、もう一つはまったく別のエリアにある、逆行分析でつくられた地球製航空機のある施設です。それらは同じ場所にはありません。別の格納庫にあります。ですから、隣接しているわけでもなく、まったく別の場所にあるのです。地下の施設には ET 宇宙機が格納されていますし、地上の複合施設の遠端部には、逆行分析でつくられた地球製航空機が格納されています。彼らは、あらゆる種類の異なる機体を使って試験をしていました。それらを組み合わせでは試し、飛ばそうとしていました。こうした機体の多くは正常に機能せず、墜落が頻繁に起きました。私が読んだ本には、すべてが同じ格納庫で行なわれていると書かれていましたが、それは事実ではありません。それらはすべて分離され、異なる人々のグループにより研究、技術開発が行なわれています。つまり、それらは区画化（compartmentalization）されているのです。こちらには ET 宇宙機に取り組むグループがいて、あちらには地球製航空機に取り組むグループがいて、その間の資料や情報の交換は第三者の人々、科学者たちを通して行なわれていました。ですから、双方が直接に交流することはまったくありませんでした。

スティーブン・グリア： あなたがその地下施設にいたとき、ET 宇宙機を見ましたか？

リチャード・ドーティ： はい、2 機見ました。それらが重力を無力化する（ET）宇宙機だとは誰も教えてくれませんでした。そのうちの 1 機は卵形でした。それほど大きくはありません。おそらく 10 フィートに 20 フィート（*3 メートルに 6 メートル）くらいでしょう。ですから、大きくはありません。宇宙機には着陸装置（脚）が付いていましたが、

それは地球の技術者が後から取り付けたものでした。というのは、その装置は宇宙機の構造にフィットしていなかったからです。また、その宇宙機には小さな丸窓が幾つかありましたが、それはほとんど液体のように見えました。つまり、それを見たときは水を通して見ているような感じでした。私はその内部を見たことはありません。見たのは外側だけです。私が見たもう 1 機は巨大で、パプース複合施設にありました。その地下施設の内部に降りていくと、右側に最初の格納庫があります。そこにそれがありました。巨大な宇宙機で、おそらく 100 フィートに 100 フィート (*30 メートルに 30 メートル) はありました。その物体が何かということは誰も教えてくれませんでした。それは墜落したやや古い機体のように見えました。なぜなら、一部損傷していたからです。しかし、その表面は変わっていましたし、あらゆる部分が異質に見えました。それは地球でつくられたものようではありませんでした。

スティーブン・グリア： 分かります。

リチャード・ドーティ： 覚えているのはそれだけです。

スティーブン・グリア： そこには生きた ET か、その遺体がありましたか？

リチャード・ドーティ： 私はどちらも見たことはありません。しかし、監視カメラと思われるものを見たことはあります。私はある建物の中で座っていたのですが、それは別の施設にいる一人 (*の ET) を映している監視カメラでした。しかし、実際に対面したことはありません。

そこにいた契約業者には、イー・システムズ、ジョンソン・システムズ、サンディア、リバモア、ロスアラモス……………テクトロニクスもそこにいました。GE (ゼネラルエレクトリック)、モトローラ——モトローラはそこに巨大な施設を持っていて、彼らの通信技術を確認したり、彼らの通信がどのように機能するのかを調べたりしていました。

スティーブン・グリア： ET の通信技術を？

リチャード・ドーティ： はい、ET の通信技術です。覚えているのはそれくらいです。当時はイー・ジー・アンド・ジー社がそこを運営していて、ジーン・ラスコースキーがその警備責任者でした。彼はいつも自分のことを警備員だと言っていましたが、彼だけは警備員ではありませんでした。彼は多くの事柄について説明を受け、詳しく知っていました。彼はポール・マクガバンのように、多くの物事を知っていました。ポール・マクガバンを知っているかどうか分かりませんが、彼は 1977 年から 1991 年まで、エリア 51 全体の警備責任者をしていた人物です。彼はその間ずっとそこにいました。今は引退して、メリーランド州ランドーバーにいます。私は彼の名前を誰かに教えたことがあったと思います。彼に連絡したら、話してくれるかもしれません。

1980年のことです。私はまったく別の要件で説明を受けるため、ライト-パターソン空軍基地にいました。しかしそこにいる間に、私はこれ(*UFO/ET)に関連したある事柄について説明してほしいと要望しました。すると彼らは、私をある施設に連れていきました——地下施設です。私たちは、歩いて階段と傾斜路を降りました——そこは巨大な複合施設でした。私は実際にそれを見たわけではありませんが、後でアーニー・ケラストラス(*1970年代にライト-パターソン空軍基地の外来技術部で働き、しばらくの間一人のETと暮らしたと言われている元米国空軍中佐)から聞いたところでは、彼らはそこに異星人の遺体を保管しているということでした。コリンズはトンネル複合施設について語りましたが、おそらくそれは本当だったでしょう。後になって、私もある機密マニュアルの中でそれについて読みました。

スティーブン・グリア： ライト-パターソン基地ですね？

リチャード・ドーティ： はい、ライト-パターソン基地です。

スティーブン・グリア： その地下ですか？

リチャード・ドーティ： はい、地下施設です。パプース地下複合施設に入るときは、傾斜路を降りていきます。円形——実際には馬蹄形(U字形)の傾斜路です。こうした区域のどれからも枝が伸びています。枝はそこかしこに広がり、エリア51の南西部、ハンガー7と呼ばれる格納庫の近くまで伸びています。途中にはエレベーターが幾つもあり、正しいバッジを着けないと入れない、区画化されたシャフト(昇降路)もあります——それらはすべてバッジ交換システム(*入所者と門衛が同じバッジを持ち、入所時にそれらを照合し交換する保安システム)です。ですから、ここでは特定の場所にしか入れません。先に述べたように、もしあなたが異星人の宇宙機に取り組んでいるとすると、逆行分析によりつくられた、別の航空機に取り組むことはできないのです。

スティーブン・グリア： 地球製反重力機のことですね？

リチャード・ドーティ： はい、地球製反重力機です。

[10]

=====
スティーブン・グリア： あなたの経歴やネットワークの中で、これ(*UFO/ET)に関連した偽のI&W(Indications & Warnings; 兆候察知と警報発出)、つまり、人々を欺くためのI&Wプロジェクトを経験したり、それに遭遇したりしたことはありますか？

リチャード・ドーティ： あります。

スティーブン・グリア： それについて、何か分かったことはありますか？

リチャード・ドーティ：それはきわめて機密性の高い事柄ですので、話すべきではないと思います。

スティーブン・グリア：私が国防情報局長官に説明を行なったとき、それが主要テーマでした。

リチャード・ドーティ：これは扱いに注意を要する、とても微妙な問題です。

スティーブン・グリア：きわめて微妙な？

リチャード・ドーティ：そうです。この質問はパスしましょう（笑い）。

スティーブン・グリア：結構です。まったく問題ありません。

リチャード・ドーティ：ソ連も、私たちと同じようにその現象（*UFO/ET）に興味を持っていました。それは、政府がスパイから訊き出したいと思っていた、重要な情報要素の一つでした。もしあなたが空軍、軍の人間なら、ソ連はあなたを手なづけ、最初にこう訊きます。“政府は UFO について何を知っているか？” 私たちも、KGB（*ソ連の国家保安委員会）も、互いにそれを知りたいと思っていました。それは実に興味をそそる情報でしたので。ですから、私たちもロシア人を手なづけ、同じことを訊きます。そうすると、彼らは KGB もこれを知っていると教えてくれます。ロシア人たちも私たちと同様にこれに興味を持ち、関わっていたのです。それは私にとり、とても興味深いことでした。

私はドイツ駐在中に、この（*UFO）問題でドイツ人たちと関わりを持ちました。BND（*ベー・エヌ・デー；連邦情報局）が、ドイツにおける CIA です。ある核兵器貯蔵施設の周辺で起きた、注目すべき事件がありました。そこに何者かが侵入し、フェンスを切断し、中に入りました——しかし、バンカー（掩蔽壕）の中までは入りませんでした。私たちはその事件について説明を受けましたが、その施設上空で目撃された 1 機の UFO と結びつけて考えることはできませんでした。それが、私がドイツ人たちと関わりを持った唯一の接点です。

[11]

=====
さて、私が関わった中で最も信憑性のある事件は、これまで一度も公表されたことがありません。それはユタ州で起きました。何年か前、ダグウェイ試験場（*ユタ州ソルトレーク市の南西約 137km）のすぐ外側で、人里離れたトレーラー生活をしている人物がいました。彼は陸軍の写真技術者でしたが、陸軍を出た後ダグウェイ試験場に行き、そこでも写真技術者として働きました。孤児で、結婚歴もありませんでした。彼は幅 14 フィート

(*4.2メートル) , 長さ 80 フィート (*24 メートル) のこのシングルワイド・トレーラーで一人暮らしをしていて、辺りには彼が建てた小屋なども幾つかありました。

ある日、ヒル空軍基地 (*ユタ州ソルトレークシティの北約 48km) の OSI (AFOSI ; 空軍特別捜査局) が私に電話をよこし、こう言うのです。“ダグウェイ近くの辺鄙な場所に住む人物から、大量の UFO 写真が送られてきた。彼とまともな話のできる人間がここにはいない。こちらに来てもらえないか？” ヒル空軍基地の OSI に 9Q はいませんでした。9Q とは、UFO 調査官を呼ぶ場合の OSI 用語です。これがあったのは 1984 年の終わりか、1985 年の初めだったと思います。私はヒルに出向き、上司と話をしました。上司は私に、君に任せるから、その人物のところに行ってみてくれないかと言いました。

私たちはこの人物を訪ねました。彼は大変な常識人でしたが、学校を 8 年生か 9 年生で終えていたため、十分な教育を受けていませんでした。しかし、カメラや写真に関することで彼が知らないことはありませんでした。彼はそのすべてを独力で学びました。つまり、陸軍が彼にそれを教えたのです。彼は長年にわたり、ダグウェイ周辺で物体の写真を撮っていました。彼は、そうした写真のすべてを収めたアルバムを、私たちにを見せてくれました。その中には (*地球外) 生物の写真もありました。私たちが、これらの写真をどこで撮ったのかと訊くと、彼はこう答えました。“彼らはここに着陸したのです” 彼によれば、彼ら (*ET) はずっと前に行ってしまったが、長い間そこにやってきて着陸していました。私は彼に、この一部始終を話してほしいと頼みました。

それが始まったのは、1968 年の秋です。彼は仕事から戻り、食事をつくっていました。そのとき突然、何かの物音がし、飼っていた猫が狂ったように走り回り始めました。彼が外に出ると、裏庭に 1 機の宇宙機が着陸しているのが見えました。彼は中に戻ってカメラを取り、写真を撮りました。生物たちが外に出てきたので、彼はその写真も撮りました。

スティーブン・グリア : どのような外見でしたか？

リチャード・ドーティ : 彼らは、まさしく EBEN (地球外生物学的実体 ; イーブン) のように見えました。彼らは EBEN でした。彼らは言葉では話しかけてきませんでした。彼によれば、彼らは言葉では話さず、彼の頭に (*テレパシーで) 話しかけてきました。彼は彼らの言うことが理解できましたが、彼らには彼の言うことがよく分からないようでした。

彼らは彼に、これらの贈り物を与えました。私は最初、これをすべて仕組まれたものだと考えました、正直なところ、私が初めてそこに行って思ったのは、これが現実であるはずがないということでした。あまりにも現実離れしていると。だから、私はヒル (*空軍基地) から来た特別捜査官に、“これはつくり話じゃないのかい？ この品々も映画に使う小道具だろう？”と言ったのです。彼は私に、君はどうしてそんなことを言うんだ？ 我々はそこにいなかったじゃないかと言いました。

彼らとのコンタクトは1960年代の終わりに始まり、彼らから間もなく去ると告げられた1975年か1976年頃まで続きました。彼らは去り際に、これらの贈り物を彼に与えました。その中には星形をしたものや、ブロンズ像に似たものがありました。小さな何かの模型のようなものもありました。

私はこの人物に、なぜ今になって私たちに知らせたのかと訊きました。それまで7年か8年はあったのに、なぜ今になってと。彼は、自分の余命はあと半年もない、だからこれらのものをどうにかする必要あるのだと言いました。私はそれを聞いて、彼は空軍に引き受けてもらいたいのだと思いました。

私たちは、この事案は本物だと判断しました。そうすると次には、NSA（国家安全保障局）やCIA（中央情報局）からトラック何台分もの人間がやってきて、これらのものをすべて調査することになります。実際、私たちはそれらを運び出すために、引っ越しトラック業者と契約しました。梱包の仕方は独特でした。というのは、これらの物体が信号を発しているかもしれないからです。私は、ワシントン本部から来た技術者の一人にこう言われるまで、そんなことは考えもしませんでした。“この品々には盗聴器が仕掛けられているかもしれません。放射能を帯びている可能性だってありますからね” 彼らは、それらをすべて本部に持っていきました。

スティーブン・グリア： 運び出された品々の数はどれくらいでしたか？

リチャード・ドーティ： おそらく2ダースはあったと思います。正確には分かりませんが、少なくとも2ダースはありました。それらがどういう材料、物質でつくられていたかは知りません。しかし、明らかにそれはEBEN（イーブン）にとり意味のあるものでした。なぜなら、彼らはそうすることに意味があると考え、それらを彼に与えたからです。本部から来た人々は、すべてのものを梱包し、運んでいきました。それ以上、その件については聞いていません。インターネット上でも、この事件のことは何一つ、見たことも読んだこともありません。しかし、ジョージ・ナップ（*米国人ジャーナリスト、ニュースアンカー、トークラジオ司会者）は知っていると思います。数年前、誰かがジョージ・ナップの前で、それに触れたのではないかと思います。いつだったか一度、アート・ベル（*Arthur William Bell；米国人アナウンサー、作家）が私に電子メールをよこし、ユタ事件について訊いてきました。私はこの人物が誰なのか知らなかったので、どのユタ事件のことかと返事しました。彼とはそれっきりでした。

スティーブン・グリア： この写真技術者の名前を知っていますか？

リチャード・ドーティ： 彼のファーストネームはジェームズといました。ラストネームはとても変わっていて、ポーランド系のような、サドースキーかザドロースキーか、何かそんなふうな名前でした。彼はポーランドの生まれでしたが、カリフォルニア州北部の孤児院で育ちました。彼の両親はポーランドから米国にやってきた移民で、西部に向かい、

カリフォルニアにたどり着きました。そして、事情はよく分かりませんが、両親は亡くなり、3歳か4歳の彼が一人残されたのです。

スティーブン・グリア：これらの品々（*写真技術者がEBENからもらった品々）がどのようなものだったか、覚えていますか？ そのうちの幾つかで結構です。

リチャード・ドーティ：そのうちの幾つかはハート形をしたブロンズで、その内部には美しい文字のようなものが描かれていました。それからセラミックでできた像のようなもの……彼らの神か何かだったのかもしれませんが。説明が難しいです。それらは小さいものでしたが、中にはこれくらいの大きさのものがあり、かなり大きいものもありました。リース（花冠）にそっくりなものもあり、周囲には様々なシンボルが配されていました。その裏面には幾つか脚のようなものがありました……スタンドか、何かの上に置くためのものだったのか……私には皆目見当がつきませんでした。私がそれらの品々を見たのは2度だけです——彼が私たちにそれを見せてくれたときと、それらを梱包するために私たちが彼のところに戻ったときです。こうして、それらの品々はCIAか、DIAか、どこか別の場所に運び込まれました。それらの品々も分析されたはずですよ。

スティーブン・グリア：その宇宙機の、白昼に撮影された写真はありましたか？

リチャード・ドーティ：もちろんです。私が覚えている写真は、すべて白昼に撮影されたものでした。それらは、これまで見たこともないほど鮮明でした。彼は宇宙機の内部も撮影していました。

スティーブン・グリア：それには何が写っていましたか？

リチャード・ドーティ：そこには計器盤や巨大なスクリーンがあり、スクリーンには宇宙図のような、星図のような、航路図のようなものが映し出されていました。彼は1枚の図を持っていました。私たちが初めて彼のところに行ったその帰り際、彼はこう言ったのです。“ああそうだ、これをあなたたちに見せるのを忘れていましたよ”。彼は、まったく手入れのされていない家のその収納庫に入っていき、線が描かれているラミネート紙のようなもの——説明が難しいですが——を取り出してきました。彼はそれを広げ、こう言いました。“彼らがやってきた場所は、ここです”しかし、そこに位置を示す座標のようなものは一切描かれていませんでした。彼はその場所がどこか知りませんでした。“しかし、これは彼らが私にくれたものです”と言いました。私たちがその日持ち帰ったものは、この図のみでした。当然、私たちは後日戻ってきて、ありとあらゆるものを持ち帰ったのです。彼らが何を解明したのかは知りません。その後、彼らは私たちに多くは教えてくれませんでした。

スティーブン・グリア：それは上（本部）に行きます。

リチャード・ドーティ：そうです。上に行って、下には降りてきません。

スティーブン・グリア： 私が信用していない実に多くの UFO 伝承があります。これらの ET 種族がどこから来たのか、何という恒星系から来たのか、聞いたことはありますか？

リチャード・ドーティ： 私が事実として知っている唯一の場所は、ゼータ・レティクル（*レティクル座ゼータ星）です。後日、私はそれを文書で読みました。

スティーブン・グリア： そこから来た種族がいるのですね？

リチャード・ドーティ： そうです。

スティーブン・グリア： 公式の情報源ですか？

リチャード・ドーティ： そうです、公式の情報源です。私たち退職諜報員グループの間には、ET 種族の起源に関して多くの憶測があります。様々な恒星系、近隣の恒星系などです。しかし、私が知っている唯一の公式情報は、今述べたゼータ・レティクルです。

[12]

=====
スティーブン・グリア： ET 偽装（シミュレーション）を扱うプロジェクトについて聞いたことはありますか？ ここで言及しているのは、あるコンタクト事件のことです。私が得た情報によれば、それは実際には ET ではなく、軍または何かの特殊作戦による ET に見せかけた、言うなれば‘演出’されたコンタクト事件だったというのです。なぜなら、この女性は機密扱いの何かを見ていたからです。この種の作戦について聞いたことはありますか？

リチャード・ドーティ： そうですね（笑い）。私にはよく分かりませんが……

スティーブン・グリア： 偽旗作戦だったのですか？

リチャード・ドーティ： はい、私たちがそれをやりました。OSI（AFOSI；空軍特別捜査局）がそれをやりました。フォートベルボア（*バージニア州）の第 7602 航空情報航空団には、それを実行した特殊グループが存在しました。彼らはある種の欠陥を持つ人々を抱えていました——解剖学的欠陥です。このグループは彼らを連れてきて人々に見せ、それを異星人だと思わせたのです。その詳細について語ることはできません。なぜなら、そのプログラムは今なお厳重な機密扱いになっているからです。おそらく彼らは、今でもまだそれを行なっているだろうと思います。間違いなく、まだ行なっていると思います。

スティーブン・グリア： そうです。私は、そのような特殊プログラムの中にいた多くの人々にインタビューしてきました。

リチャード・ドーティ： はい。1986年か1987年に、ワシントン州タコマで機密性の高い作戦が行なわれました。その事件はシアトルのある海軍基地で起きました。場所はホイドビー島海軍飛行場ではないかと思います。どうにかしてこの基地に入り込んだ民間人たちがいました。そこで彼らは、見るべきではない何かを見たのです。そのため、この特殊グループが出てきて彼らの家に入り込み、目撃者たちをひどく怖がらせました。

スティーブン・グリア： エイリアン事件を演出したのですね？

リチャード・ドーティ： そのとおりです。これはとても微妙な問題です。私たちが基地防衛のために行なった防諜活動の中に、基地外の人間を雇って通報者にするというのがありました。カートランド（*空軍基地）にいたときのことで。私はこれをやりませんでした。そこには私たちが詐欺師と呼ぶあらゆる種類の人々がいました。彼らは誰でも雇うことができました。彼らは出かけていき、まずは報道関係者を雇います。なぜなら、物事を誰よりも早く知るのには彼らだったからです。ですから、アルバカーキ-サンタフェ地区のあらゆる通信社、テレビ局、ラジオ局には、私たちの密告者がいました。私たちは通報を受け、彼らに金を払いました。彼らには大金を払いました。彼らを雇うことができた理由は、彼らに金を払ったからです。それはいささか物議を醸す活動でした。

スティーブン・グリア： そのような密告者がいた全国メディアを知っていますか？

リチャード・ドーティ： もちろん知っています。彼の名前は言いませんが。これらの密告者の中に、アルバカーキのローカル局から雇った一人の女性がいました。彼女はやがて全国局の仕事をするようになりました——NBCです。彼女は私たちに、あらゆる情報を提供しました。彼女に指示を与えるのは、私たちではありません。ワシントンの誰かが、彼女に指示を与えたのです。しかし彼女は、これから起きることを私たちに教えました。

スティーブン・グリア： これらの‘アセット’（*スパイ）は、話が露見するのを止めることにも役立ちましたか？

リチャード・ドーティ： はい、役立ちました。それは何も UFO のことだけではありません。空軍や軍、基地の保安、スパイ活動、等々に関わりのあることなら何でもです。もし、彼らが何か興味深いことを耳にし、それが私たちにとって必要なことだと思われたなら、彼らは私たちに知らせます。

スティーブン・グリア： 何かが放送されるのを止めておくこともできましたか？

リチャード・ドーティ： はい、もちろんです。それをするのできる、より高いレベルのプロデューサーやディレクターもいました。

スティーブン・グリア： 報酬はどのようにして支払われましたか？

リチャード・ドーティ：現金です。彼らに渡す書式用紙がありました。50ドルを超えた場合に受領のサインをするものだったと思います。こうした現金払いは、時として高額になりました。彼らには、こう言うのです。“これはIRS（国税庁）に報告しなければならないものだから”もちろん、そうするつもりなどないのですが、彼らにはそのことは言いません。私たちは常に金（マネー）を持っていました。資金の入手場所は様々でした。たとえば、何かの防諜作戦のために5,000ドル必要だったとします。すると、彼らはある番号を私たちに教えます。つまり、そこが金のありかというわけなのです。誰かが銀行に資金を入金し、私たちはそれを使うこととなります。そうでなければ、彼らはその代りとなる証券の類を私たちに渡します。しかし、資金の出所はいろいろあったと思います。それがどこから来たのか、私は知りませんが、すべて政府資金であったことは知っています。政府のどこかです。議会が資金の割り振りをします。しかし、そこには数多くの闇のプロジェクト、闇の資金があります。私たちはその一部を使っていたのです。

[13]

=====
スティーブン・グリア：さて、あなたにはこの質問をしたいと思っていました。ベクテル社（Bechtel Corporation）についてです。あなたはベクテル社と何らかの関わりを持っていましたか？ベクテル社はこの問題（*UFO/ET）に関わりを持っていましたか？

リチャード・ドーティ：ベクテル社（*世界最大級の建設会社）は、ネバダ実験場を含む幾つかの施設で、警備と運営を請け負っていました。私とカートランド（*空軍基地）で一緒だった元同僚が、彼らの主任警備員の一人だったのです。ベクテル社は、ネバダ実験場——今そこはネバダ国家安全保障施設（NNSS）になっていますが——で行なわれていた、異星人の技術の逆行分析（リバーズ・エンジニアリング）に関する多くの実験に関与していました。サンディア研究所は、タイムトラベル——時間の中を逆行したり、先行したりすることができる——研究に資金を出すプロジェクトを持っていました。彼ら（*ベクテル）は、様々な実験を行なうための施設を建設したのです。彼らはある地下施設の中で巨大な磁石を用い、磁場にレーザーを照射したりしました。時空構造に穴を開け、タイムトラベルを実現しようとしたのです。私はそれらの幾つかを見ましたし、そこでの防諜プロジェクトについても説明を受けました。しかし、その成果がどうだったのかは知りません。彼らがその方法を解明したのかどうかについてもです。

スティーブン・グリア：他の実験についてはどうですか？いわゆるテレポーテーション、つまり空間を非線形的に移動する技術について、耳にしたり偶然目撃したりしたことはありますか？

リチャード・ドーティ：それは、彼らがそこで行なっていたこのプロジェクトの一部でした。彼らは実際に、何かをテーブルの一方の端から他方の端までテレポーテーションで移動させていました。それは彼らが達成した最良の結果だったと思います。知っているのは

それくらいです。私は気付きませんでした。彼らはもっと多くのことを行なったかもしれません。

スティーブン・グリア： しかし、あなたはそれについて知っていたのですね。

リチャード・ドーティ： はい、私は知っていました。私は実際に、通常の航空機ならなし得ない動きをする航空機を1機、グルームレイク (*エリア 51 に隣接する乾燥湖) 上空で見ました。加速し、時速 1,400 マイル (*時速 2,240km) で飛びながら一瞬で停止し、向きを変えたりする。それから真っ直ぐ上昇して停止し、次に再び元の場所まで下降する。しかも、これは巨大な航空機でした。これは卵形をした異星人の宇宙機で、それを彼らはそこでテストしていたのです。1987 年のことです。常識で考えるなら、それは通常の航空機ではあり得ないことです。それは反重力とか、何かそのようなものでなければなりません。そうでなければ、パイロットは死んでしまうでしょう。そのとき、私の隣に一人のパイロットが立っていました。F-106 (*迎撃戦闘機) に乗っていた経験豊かなパイロットで、彼は私にこう言いました。“あのような動きでは、どんなパイロットも生存できる見込みはありません”

スティーブン・グリア： G フォース (*重力加速度) ですね。

リチャード・ドーティ： はい、G フォースです。彼はこう続けました。“加速はまだ何とか耐えられます。問題は停止です。あのような停止では、巨大な G フォースが体をバラバラに引き裂くでしょう”

スティーブン・グリア： そうです。脳みそが鼻から飛び出します。

リチャード・ドーティ： そのとおりです。それは私が見た、説明のできない異様な物事の一つでした。今でも理解できません。

スティーブン・グリア： それに搭乗した地球人パイロットはいましたか？

リチャード・ドーティ： それに着陸したのを見たことはありませんので、私は知りません。

[14]

=====
スティーブン・グリア： それを操縦した空軍パイロットに会ったことはありますか？

リチャード・ドーティ： キャッシュランドラム事件だけです。私は実際にそのパイロットに面会しました。搭乗者は4人いました。パイロットが二人、機器を扱うシステム将校が一人、4人目が何をしていたか覚えていませんが、航法士か何かだったでしょう。私は彼らに面会しましたが、あらゆる不具合が発生したようでした。

彼らはネバダ州から何の問題もなく離陸し、順調に飛行しました。彼らはテキサス州のある空軍基地に向かっていました——それはビッグスプリングのウェップ空軍基地（*1977年に閉鎖後、ビッグスプリング・マクマホン-リンクル空港として使用）ではなかったかと思います。彼らが速度を落とそうとしたとき、いろいろな問題が発生しました。彼らが出力を減じると、多くの障害が発生し、ほとんど墜落しかけました。彼らは救助ヘリコプターを呼びました。墜落を免れないと考えたからです。ヘリコプターがやってきましたが、彼らはどうにかしてそれを再び飛行できる状態に戻し、どこかに着陸させました。その途中で、その航空機（*地球製反重力機）からは大量の放射線が周囲に撒き散らされました。パイロットたちは誰もその影響を受けませんでした、地上にいた不運な人たち3人がひどくその影響を受けたのです。その後、彼らは再びそれを操縦し、ネバダ州まで帰りました。その航空機はかなり大きなものでした。円盤形ではなく、巨大な卵形でした。

スティーブン・グリア： それは人間がつくったものでしたか？

リチャード・ドーティ： それは人間が逆行分析（リバース・エンジニアリング）でつくったものでした。

スティーブン・グリア： 逆行分析ですね。

リチャード・ドーティ： そうです。彼らはそれで初飛行をする前に、9箇月間の訓練を受けました。それからさらに4箇月か5箇月かけて、ネバダ州一帯を訓練飛行しました。航空機の動作は申し分ありませんでした。問題は、それが地球の原子力推進システムを使い、異星人の宇宙機をベースにした地球製反重力機だったことです。しかし、それは十分には洗練されていませんでした。なぜなら、異星人の推進システムを逆行分析することはできなかったからです。彼らは時々それを作動させることはできましたが、飛ばすために必要な操作を人間のパイロットにさせることはできませんでした。そこで彼らは、地球の原子力推進システムをそれに搭載したのです。そして、それが不具合を生じました。そのパイロットによれば、彼らは高い高度を飛行していました。どれくらいの高度だったのかは覚えていませんが、何の問題もなく、飛行は順調でした。しかし、速度を落としてからおかしくなり始めました。あらゆる不具合が立て続けに起きました。システムが異常をきたし、推力の制御ができなくなりました。その一方で、スラスタ（推進装置）はあらゆる方向に動きました。ある種のフィルターがありましたが、それは機能しませんでした。状況は混乱をきわめました。

スティーブン・グリア： その航空機は、どのような速度に達したのですか？

リチャード・ドーティ： マッハ1（*音速の1倍）です。私が教えられたのはそれだけです。おそらくそれ以上だったとは思いますが、面会時にパイロットが教えてくれたのは、マッハ1でした。

スティーブン・グリア： それを聞くと、その航空機は幾つかの点では ET 宇宙機であり、また別の点では普通の地球製航空機のようにです。いわば両者の交配種のようなものですね。

リチャード・ドーティ： まったくそのとおりです。ボディ（機体）など、多くは ET 宇宙機ですが、推進システムだけが地球製です。それは米国の従来からある原子力推進システムでした。そしてそれが機能しなかったのです。

スティーブン・グリア： 搭乗者は 4 人だったのですか？

リチャード・ドーティ： はい、4 人の地球人です。

スティーブン・グリア： 結構です。

リチャード・ドーティ： 彼らは誰も放射線を浴びませんでした。浴びたのは地上にいた 3 人だけです。

スティーブン・グリア： すばらしい情報を提供していただき、心から感謝を申し上げたいと思います。

リチャード・ドーティ： どういたしまして。

スティーブン・グリア： ご協力に感謝します。

リチャード・ドーティ： はい。

スティーブン・グリア： ありがとうございます。

（訳： 廣瀬 保雄）